

今回は、伊丹ユネスコ協会会長の莊司幸子さんに、11歳まで暮らした満州・奉天ほうてんでの戦争体験などについて語ってもらいました。

## 中国からの引き揚げ体験

莊司幸子

### 平和な日々が終わり戦争に突入

今日も何事もなかったかのように、燃えるような真つ赤な夕陽が西のかなたに沈んでいきます。裕福ではありませんが平和な一日の終わりです。

しかし、私が奉天ほうてんの葵国民学校へ入学したその年、昭和16年12月8日に日本は太平洋戦争に突入しました。

### 厳しく緊張の連続だった学校

当時の学校は厳しく、いつも緊張の連続で楽しいところではありませんでした。

冬の全校朝礼は、零下20〜30℃の中で校長先生は常に、「戦っておられる兵隊さんのご苦労に感謝し、内地ないちの子に負けないように勉強しなさい」と話し、内地ないちつてどこ?と思うていました。

低学年はあまりたたかれることもありませんでしたが、小学5・6年生の男子は毎日、訓練があり、特に金曜日は厳しい教練が行われて、軍服を着た教官から厳しく殴られていました。

冬になると校庭を掘って土手を築き、水が張られてスケートリンクができます。でも、徐々に物資不足でスケート靴が手に入らなくて、私はいつも借り物のスケート靴でした。

登校するときは運動靴を履きますが、遊ぶときははげたを履いていて、走り回るときはみんなげたを脱いで裸足でした。

男の子は兵隊ごっこが大好きで、女の子はい

つも看護婦さん。元気に遊んで夕陽が沈むころ、みんな一様に庭で足を洗って家に入ります。

### 空襲を避け列車で移動しながら暮らす

しかし、戦況は次第に激しくなり、夜間の空襲警報も発せられ、父の手作りの防空壕ぼうくうこうに逃げました。

いつからか通学もせず空襲を避けて列車で移動しながら暮らしていました。

父は南満州鉄道の社員でこのとき一緒ではありませんでした。5歳のときに母を亡くし、1歳上の兄と3歳下の弟と私は、祖父母と暮らしていました。「今日は大事な放送があるらしい」と列車内に情報が走りました。小学4年生の昭和20年8月15日、終戦をむかえました。

そして、列車は直ちに北へ向かい、真つ暗な奉天ほうてんの家に帰り着きました。

### 終戦をむかえ暮らしは一変

翌日から暮らしは一変し、これまで安心して暮らしていた社会は、全くの無法地帯と化とし、夜になると略奪や暴動が起きました。日本人が襲撃を受け殺されたり、連れ去られたりしました。

ある日、ぼろぼろの青い服を着たソ連兵が大通りを通って行くのをカーテンのすき間から息を潜めて見ていました。シベリアからの囚人のようで、その日から民家に押し入っては銃を突きつけ、物だけでなく人(若い女性)も連行して用がなくなると虫けらのように放り出すのでした。赤ら顔の太い両腕に腕時計を何十個もつけて、さらに要求する姿はそれまで中国人と日本人しか知らなかった私には鬼のように見えました。「ダワイ！」(ロシア語で「早くしろ!という意味」と言われ使役に連れて行かれ、ジャガイモの皮むきや雑用をさせられる。用が終わっても安全に帰宅できる保障はなく、家族は父が無事

で帰ってくることを祈るばかりでした。

## 祖母の死と中国残留孤児

昭和21年の夏に最愛の祖母が亡くなり、祖父と兄が遺体を荷車に載せて運んで行きました。

秋になり、満州北部から飢えと寒さの中を歩いて歩いて避難民が次々と近くのお寺にたどり着きました。おんぶされた赤ちゃんはすでに息絶えて、寺の境内に掘られた穴に何人もが人形のように並べられて埋葬されました。

大人も子どもも体力のない人々が、発疹チフスやコレラなどで次々と命を落とす。親が先に亡くなって取り残された多くの日本人の子どもたちが中国人に養われたようです。

日中国交が（昭和47年に）回復して、父母の祖国・故郷へ帰国したいと願う人々が中国残留孤児として帰国することになります。

すでに終戦後、40年近くたっていました。

### 父が結核に…日本に引き揚げる

満鉄の中国残留組であった父は結核を患っていることが判明し、急遽、引き揚げることになりました。

一 中華民国と満州国にかつて存在した、現在の中  
華人民共和国瀋陽市に相当する都市。

二 旧日本国憲法下において、北海道、本州、四  
国、九州がこれに該当した。本土とも呼ばれ  
た。

三 軍隊で行う戦闘訓練。

四 シラミによって媒介される感染症。戦争、貧  
困、飢餓など社会的悪条件下で流行することが  
多い。

9月下旬の寒い朝、ぎゅうぎゅうの貨物列車に乗り奉天を離れました。父は熱があり、動くのも大儀「そうでした。

家族の荷物は兄と私が背負う麻袋で作ったりユック2つ、弟は母のお骨箱の入ったリュックを背負って歩きました。列から遅れることは死を意味します。黙々と歩き続けました。

乗船場の葫蘆島に着くと米軍兵がいて銃を持つていましたが、子ども心になぜかこれでもう殺される危険はないと思いました。

頭からDDTをかけられて、大きな病院船に乗り11月初め、長崎県の佐世保に上陸しました。

父は、20日後に故郷の福島県にて他界しました。もし、父が満州で命を落としていたら私たち兄弟も孤児になって、日本語を忘れてしまっていたことでしょう。

25年前（昭和61年）から、伊丹ユネスコ協会が中国残留孤児とその家族の自立支援のため、日本語教室を開設していますが、多くのボランティアと共にお手伝いできることを感謝しています。

一 経口感染症の1つで、コレラ菌で汚染された水や食物を摂取することによって感染する。

二 主に結核菌により引き起こされる感染症。明治初期までは労咳とも呼ばれていた。

三 疲れなどのために何をするのも億劫なこと。

四 かつて使われていた有機塩素系の殺虫剤。日本では、戦争直後の衛生状況の悪い時代、アメリカ軍がシラミ等の防疫対策として使用した。